秋思

劉禹錫

古より秋に逢うて寂寥を悲しむ
我は言う秋日春朝に勝ると
晴空一鶴雲を排して上る
便ち詩情を引いて碧霄に到る

【作者】劉　禹錫（七七二～八四二年）中唐の詩人。河北省定県の人。字は夢得（ぼうとく）、禹錫は号。幼少より 文才あり、七九三年の進士、官は検校礼部尚書をもって終る。柳宗元、八居易と親交あり。八居易は劉禹錫を「詩豪」と評した。享年七十一歳。

【語釈】＊秋　思…秋のものさびしい思い　詩題としては秋詞とするものもある
＊寂　寥…もの静かで　さびしい　＊秋　日…ここでは春朝に対して秋の日ざしの輝くとき
＊詩情…詩意。うたごころ。　＊碧　霄…碧空　あおぞら

【通釈】昔から人は秋になると物寂しく、悲しい思いをするが、自分は秋の日なかの方が 春の朝にも勝っているといいたい。　晴れわたった秋空高く　一羽の鶴が、雲を押し分けるようにして 舞い上って行く。それは人のうた心を誘うように、共に大空の上まで昇りつめるようである。